



シリーズ研究会「中東ベーシック」

## 国会選挙後のイラン

松永泰行 東京外語大准教授

2008年4月7日

国際社会において、過激な言動が目立つアフマディーネジャード大統領だが、国内では主に経済の失政から非常に評判が悪い。先の国会選挙でもその傾向は明らかだった。しかし、2009年の大統領選でも、おそらく優位に立つことになるだろう、と見通した。

それは、ハーメネイー最高指導者と盟友・ジャンナティー師の枢軸が支えているからだという。

アフマディーネジャードが大統領である限り、対米関係も、核問題も動かない。アフマディーネジャードはハーメネイーに泳がされているスポークスマンに過ぎない。ハーメネイーとジャンナティーは、現状を危機とは認識しておらず、この形が体制維持のためには得策だと計算しているのだろう、と分析した。

お手元の資料（巻末に掲載）は、国会選挙に係ることで大体終始しています。イランの国家権力機構というもののとの関係を考えますと、国会というのは、イランの場合は大統領制の国でありまして、さらに最高指導者というのが大統領の上にありますので、その相対的な地位、それから権限というものも相対的に低くなっています。

さらにイランの場合、立法措置とイスラーム法との特殊な兼ね合いの関係で、護憲評議会とか監督者評議会とかいわれている機関があります。12人の委員からなる機関で、うち6人が、頭にターバンを巻いています。イスラーム法学者の人たちが6人いて、その人たちがほかの6人よりも権限が強い形で座っている。その護憲評議会あるいは監督者評議会と呼ばれる機関、英語だと Guardian Council といいます。そこが実際の国会の立法権限を実質的に弱めています。そういう関係で、権力機構の中での国会の権力というのは比較的限られている。

かつてのラフサンジャーニーが国会議長をしておりまして1980年から89年までの時期に比べますと、現在の国会議長の政治的重要性というものも格段に落ちます。つまり、あのときラフサンジャーニー国会議長になぜ権力があつたかといいますと、アヤトラ・ホメイニーに対するアクセスを持っていた。何かことがあるたびに、アヤトラ・ホメイニーの自宅に行って「先生、どうしましょう」と相談をすることができたわけです。ホメイニーさんも、現在の最高指導者よりも力があつたので、その時期は、国会議長は非常に力があつて、国会で物事は決まっていた。

ところが、90年代以降、それから2000年以降、現在はその当時とは比べものにならないほど、国会議長の権限、それから国会自体の権限というのが制限されてきております。

したがって、いまはイランの主要な政策、例えばアメリカとイランの関係でありますとか、核問題に関する政策でありますとか、近隣諸国との関係でありますとか、EUあるいは日本との関係というものに、国会選挙の結果に応じてそれがどうこうするということは、実際にはないわけであります。

では国会選挙というのは全く意味がないかと申しますと、そういうことは全くない。非常に操作されて、介入を受けた形ではありますけれども、その上で自由な選挙がなされています。したがって世論のメルクマールとして、世論を占ううえで重要な指標と見なすことができます。さらにその選挙結果に基づいて次の政治プロセスが進んでいくわけですから、政治プロセスの今後を占う、あるいは今後の方向性がみえてくる分岐点といえますか、そういう意味では重要であります。

したがって、まず冒頭で、そういうただし書きつきですが、国会選挙について、そのプロセスと結果と、どういう意義があつたのか、というお話をさせていただきます。それから、それ以外のイランに関する関心事項であろうと思われます対米関係とか、核問題とか、その他の問題についても言及させていただきたいと思います。

### 監督者評議会の機能

資料の1ページ目は、国会選挙の制度的な部分、それから問題点をまとめたものです。要点だけざっと見ておきます。一院制です。立法府ですが、監督者評議会という機関において、イスラーム法学者の決定によって、一度国会で決まった、可決された法律が差し戻しになったりとか、あるいは廃案になったりということが頻繁に起こります。

定員は、今は290議席です。革命から二十数年、270だったのですけれども、人口の増加に従って議席をふやす選挙法の規定がありますし、憲法にも言及されていると思いますが、それに従ってしばらく前に20議席追加になりました。

選挙区は207あります。いまイランは、地方は全部で30州ありますけれども、一つの州が1選挙区になっているのはコムの場合だけであります。それは特例です。なぜかという、州自体が比較的小さいのです。それ以外のところでは、各州を幾つかに分けて、選挙区が設定されています。

したがって、複数の議席を持っている選挙区があるわけです。一番目立つのは首都テヘランで30。その次に多いところは6人になりますから、がくっと減ります。タブリーズが6で、マシュハド、

イスファハーンが5議席、その次に大きいシーラーズが4議席、あと3人区の選挙区が8つありまして、2人区が22ということです。残りは全部1人区です。したがって、かなりたくさんの1人区があることになります。

選挙方法ですけれども、今回初めて日本の共通一次試験のようなマークシートで、番号を塗りつぶすような、機械で読み取れるよう投票用紙が導入されました。ただ今回は試験的な導入で、実際の票の集計には使われませんでした。正式な集計にはマニュアルな形で人が読んだものを使いましたが、実験的に機械でも集計したようです。

私も選挙投票日に見てまわったのですが、新たな用紙が使われていました。比較的難しい仕組みで、記号と数字からなる候補者コードを塗りつぶさなければいけないのですけれども、少なくともテヘランの北部の人はちゃんとやっていました。

候補者コードが導入される前の段階では、通称名と戸籍名の違いで、無効票になったりするような場合もありました。投票手続は複雑なのですが、革命後第8回目の国会選挙であり、大統領選挙も9回やっていますので、選挙を実施すること自体については、非常になれた感じはあります。

それから、当選者はどうやって決定するのかと申しますと、これはフランスの議会選挙と同じような形であります。1回目である程度の足切りの数を獲得してない場合に、2回目の投票で決選投票を行う。革命直後は、その選挙区の総投票数の半分以上が1回目で当選という規定だったのですけれども、半分にしますとちょっと高過ぎて、だれも最近では半分まで得票できないものですから、3分の1に下げて、その3分の1でも入らないというので、いまは4分の1まで下がっています。

今回のケースでいいますと、テヘラン30人区で、上位19名がその4分の1の足切りラインを超えまして、1回目で当選。残り11議席が第2回投票に回るようになりました。

2回目のほうは、相対多数の候補が当選になります。第1回目投票で当選した人の獲得票数と、第2回投票で当選した人の獲得票数が1けたぐら

い違うことも場合によってはあります。しかし、実際に登院したときには、それぞれ同じ権限の議員になります。

## 立候補者の資格審査

資料の次のところが立候補者の資格審査です。ここが問題なところですよ。イランで、こういう制度が導入されている直接の背景をまず説明します。当初、革命支持派の中のイスラーム右派、イスラーム左派というのが政治的な対立をしていて、ホメイニーさんが生きていた1979年から89年まではそれが拮抗していました。ホメイニーさんは、大体両派のどちらも一人勝ちをしないように、バランスをとっておりました。けれども、ホメイニーさんが亡くなった89年以降、右派(保守派)がアッパーハンドを握りまして、右派が左派を政治的に排除する手段として、この事前審査を導入しました。

したがって、1990年から導入され、最初は専門家会議というお坊さんだけの会議の選挙で使われました。その後92年の国会選挙から現在の形で使われるようになったのです。理屈はいろいろありますが、その背景にある哲学というのは、エリート主義です。国会議員にふさわしい候補者というのは、単に有権者とか、25歳以上とか、大卒であるとか、それだけではだめで、やはり国家に対する奉仕の実績があるとか、あるいは何らかの専門性を持っている必要があるとされています。外国に留学してPh. Dを取ってきて、経済学の博士号を持っているとか、従軍経験があるとか、州知事を経験したとか、州の何とか事務所の所長をやっていたとか、そういったある程度の専門性や国への奉仕実績がないと候補者になるにはふさわしくないという考え方です。

問題は、だれがそれを判断するかですが、監督者評議会が判断する。きわめて権威主義的で、家父長主義的で、エリート主義的なシステムですけれども、それをイスラーム体制の倫理的な枠組みの中で、イスラーム法的に正当化しております。もちろん国内的には非常に強い反発があります。左派とか改革派とか世俗派、それから宗教的ナショナリスト達は、こぞってこの制度について批判をしているわけです。しかし、いかんせん憲法が、

憲法解釈権を監督者評議会に与えておりますので、監督者評議会が自分で自分に憲法解釈を依頼しまして、我々はこう解釈するとして、この制度を正当化しているわけです。1990年に決定され、それ以降こういうことになっています。

もちろん、最高指導者が介入して、こういう制度はやめよう、憲法改正をしようといえどももちろん変えることはできるわけです。現在の最高指導者は、後で触れるかもしれませんが、監督者評議会の書記（リーダー）でありますところのアヤトラ・ジャンナティーにおんぶにだっこいたしますか、非常に依存しておりますので、その可能性はほとんどありません。

### ハーメネイー最高指導者の盟友

最高指導者になったときハーメネイーさんは弱冠50歳でした。いろんなレジティマシーの面で問題があった関係で、政治的な盟友をつくる必要がありました。ラフサンジャーニーはライバルですから、ラフサンジャーニー以外の人で盟友をつくらなければならなかった。そこで、ハーメネイーさんが選んだのが、このジャンナティーです。ジャンナティー=ハーメネイー枢軸といいますか、これが非常に堅固な関係でして、ジャンナティーをハーメネイーさんが切るということは、事実上あり得ません。それで、こういうセットアップというシステムは、しばらくの間、ジャンナティーさんが亡くなるか、ハーメネイーさんが亡くなるかしない限りは、なかなかなくなるものと思われま

す。特に資格審査で政治的に対立している反対派閥の候補者を切るときに使われるのが、資料にある選挙法該当条の第1項、第3項、第5項です。コミットメントが足りないとか、イスラーム法学者の絶対的統治をちゃんと信じていないとか、選挙区で悪い評判があるとか、そういう理由で、立候補者の資格を認めずに、選挙プロセスから排除するということを行っています。これは、相手がお坊さんであろうが現職議員であろうが、ズバズバ切られます。今回もかなり切っております。

資料の次のところに第2回選挙から今回までの

資格審査で落とされた人のパーセンテージを表に出しています。左から4番目の列の、Rate of Disqualification というところですが、今回は36.4%です。これは私の計算で、イラン政府の発表とはちょっと違うのですけれども、イラン政府の発表した数字をもとに私が計算したものです。彼らは同じ数字を発表して、パーセンテージも発表しているのですけれども、違うのですね。何でそういう計算になるのか不思議ですが、私の計算では、今回は第4期・第5期に近く、一番高い部類です。

資料の2ページ目、実質的な部分に入ります。イランの国内政治を考える際に、派閥は無視できません。すでに保守派とか改革派、あるいは右派、左派という言葉、私は使いました。大きく分けま

すと、まず体制内政治勢力があります。イスラーム法学者の統治体制である現体制を支持していて、現体制の憲法を受け入れていて、その枠組みの中で due process に沿って政治をやっていくということを認めている勢力です。もっと分かりやすく言うと、アヤトラ・ホメイニーの権威を認めていて、アヤトラ・ハーメネイーの権威も認めていて、憲法も認めていて、現在のセットアップというのも認めて、その中で政治をする。そういう勢力の中にかつては右派、左派といわれ、現在は保守派、改革派と呼ばれる勢力があります。

それ以外もあるわけです。現在のセットアップを批判しながら、国内に残っていて、国内で政治プロセスにも参加したいし、新聞などに意見を表明したいし、雑誌も出したいし、政治集会もやりたい。例えばイラン自由運動、これは革命(1979)が起こった直後に、暫定政権の首班を務めたメフディー・バーザールガー

ンが1940年代につくった政党です。バーザールガー

ンは亡くなって、エブラヒーム・ヤズティーという2代目の党首が受け継いでいます。彼らはセットアップは批判するけれども、憲法があるんだからしょうがない、憲法は認めますという立場です。我々も選挙に参加したいといって、候補登録はするのですけれども必ず、あなた方は口先では憲法を受け入れているというが本当は受け入れてないだろう、と監督者評議会のほうは主張して、毎回、落とされるのです。

こういう実質的に参加を阻まれている勢力は、とりあえず置いておきます。実際存在していますし、言論空間の中には参加しています。新聞のインタビューとかには出ますけれども、それ以上の活動は許されていません。

### 体制内政治勢力の動き

体制内政治勢力の中に、かつてはイスラーム右派、イスラーム左派というのがありました。イラン・イラク戦争のころですけれども、右派というのは比較的伝統的な文化的保守、自由経済、バーザール経済派でした。左派というのは統制経済で国家主義的で、革命の輸出とかいってヒズボラーとも関係を持っていた。しかし、1988年にイラン・イラク戦争が終わり、1989年にはアヤトラ・ホメイニーが亡くなります。それから冷戦構造もなくなり、ソ連の崩壊にもつながりますから、旧社会主義的な左派はもうはやらなくなります。

そうするとラフサンジャーニーが大統領になりました89年以降、イランも戦後復興、それから再建の時代ということになります。統制経済ではなくて、新自由主義的な経済で、国際経済システムに参入して、外国投資を受け入れてという方向へ、大統領はイニシアチブをとって動きます。

そういう中でかつてのイスラーム左派は、世の中の流れが変わって、自分たちの主張というのは、すなわち革命の輸出であるとか、パレスチナの大義であるとか、統制経済とかは、国民からも受け入れられないし、受け入れられていないのは選挙結果から明らかなので、経済政策を含めて体外関係に対する基本的な方向性を変えなければいけなくなったわけです。

そこで、左派のほう生まれ変わります、お坊さんのほうはなかなか生まれ変われなかったのですけど、非お坊さんの、世俗の左派のほうは割と早く、92年ぐらいから生まれ変わった。それで、イスラーム左派ではなくて、改革派というふうに名前を変えている。かつての左派と、いまの改革派は同じ人たちですけれども、いっている内容は変わっている。実際に改革志向になっている。

右派のほうは、昔は伝統的な右翼といいますか、

文化的な右派だったのですけれども、国家機構の中での既得権益というか、権限をどんどん集めていった段階で、体制内守旧派といいますか、体制内保守派という形に、彼らもスタンスが変わってきます。したがって、そういう保守派の中には、いわゆる文化保守の人間だけでなく、この体制を命がけで守ると自負する治安関係者、革命ガードの出身者とか、イデオロギー的な右派などがどんどん入ってきます。したがって、保守派も、革命当初の右派というものと大分変わってきています。

それから、例えば、10年ほど前だと穏健で実務的なラフサンジャーニー派、保守のハーメネイー派、改革のハータミー派の3つに分けて説明するのが普通だったかと思いますが、現在は、保守と改革の2つで説明するのが最も適切な状況に変わってきていると私は思います。

ラフサンジャーニー派というのは、80年代の当初、右派にくっついていました。80年代の後半から90年代の前半になるにつけて、穏健派、中道派、プラグマティスト派ということで、だんだん右派と距離があいてきたわけです。ラフサンジャーニー派の政党は1996年に旗揚げされたのですけれども、その直接のきっかけは、ラフサンジャーニー大統領が推した国会議員候補を、テヘランの立候補予定者を、右派の保守派が受け入れなかったからです。

ラフサンジャーニー派と右派というのは、92年にくっついていましたから、96年にもくっついていてもよかったのですけれども、そこで仲たがいをします。96年、97年というところでは、本当にラフサンジャーニー派は中間派だったのですけれども、それ以降、99年、2000年、2001年、2004年、2005年の選挙では、ラフサンジャーニー派はハータミー派とくっついていきます。

したがって、現在は、旧中間派のラフサンジャーニー派というのは改革派の一部になっています。これはもう日和見的な形をつくっているのではなくて、がっちりとくっついていきますので、ラフサンジャーニー派とハータミー派を分ける必要がない。穏健派と改革派が今回は合同したという説明をする必要はない。今はラフサンジャーニー派と

ハータミー派で改革派を構成をしています。ラフサンジャーニー派は20年前は右派、保守派の側にいたのですけれども、だんだん動いてきた。

## 保守派と改革派がそれぞれ2つに

今回の選挙に関していえば、この大きな2つの、保守派と改革派の中がさらに2つに分かれました。保守派の中に2つの選挙本部というのがありまして、改革派のほうにも2つの選挙本部ができたのです。それぞれの派が一本化できなかった結果なのですけれども、保守派のほうは、「原則忠実派統一戦線」といっています。保守派と呼んでいたのは2000年の選挙までなのです。2000年の選挙で保守派は大敗しました。改革派のハータミー派が多数を取ったのです。それ以降、保守派の名前で出ていると選挙に勝てないものですから、名前を変えたのです。2004年の選挙から、あるいは2003年の地方評議会選挙からともいえますけれども、原則忠実派というふうに名前を変えました。

これはペルシャ語だと「オスールギャラー」というのですが、「オスール」というのは、アラビア語の「ウスール」で、「原理原則」という意味です。英語でこれを「ファンダメンタリスト」というふうに、ワイヤーサービスなんかで訳しているところがあると思いますけれども、ファンダメンタリストというと、宗教的原理主義者と混同されると思います。

彼らが、「オスールギャラー」といっている「オスール」というのは、革命のオスール、革命の原則、革命体制の原則なのです。イスラームという宗教の原則ではないのです。そういうことはもはやだれもいっておりません。革命体制が30年近くなりますから、彼らがいつているところの原理原則というのは、革命体制、イスラーム体制、イランのこの体制に我々のほうが忠実だということです。改革派のほうは、民主化だとか自由化とか人権だとかいつているが、ああいうのは西洋からの借り物であって、革命体制に忠実ではないというわけなのです。自分たちこそが革命イランに忠実であるという意味で「原則忠実派」という名前にしている。中身は保守派なのです。

保守派の中が2つの選挙本部に分かれたのです

が、2番目のほうは、1番目のほうの原則忠実派統一戦線、略称で「統一戦線」というのですが、統一戦線に漏れた現職議員などがつくったものが「拡大連合」です。我々も原則忠実派ですよ、まあ独立系で出るよりはよいということで、別に選挙本部をつくりましょうという程度のものです。

時間を節約するために話をちょっと簡略にしますが、統一戦線というのにも寄り合い所帯です。資料にあるようにA、B、Cという3つの派閥から構成されています。A、B、C、それから分派、これを仮にDというとしめすと、AとBとDはアフマディーネジャード大統領に批判的なのです。保守派の中でも、アフマディーネジャード現大統領は非常に評判が悪くて、統一戦線ということで1つの選挙本部をつくりましますけれども、実は路線の違いというのは明らかです。現職国会議員と、政府の間もいろいろ確執がありまして、政府が出してくる予算に対して、根本的な批判をしたりするのです。

Aの伝統的保守派、代表的な人物は、ラリジャニです。つい去年まで核問題の交渉担当をやっていましたが、大統領と意見が合わないで辞任しました。彼はもともと伝統的保守派の出身です。お父さんもお坊さんですし、弟もおじさんもお坊さんです。お父さんはナジャフで、アヤトラをやっていたのです。ラリジャニはナジャフ生まれです。お父さんが、フセイン政権に追い出されてコムに戻ってきたので、ラリジャニはコム育ちということですが、お坊さんの家系です。彼は伝統的保守派であります。したがって、彼の経済政策などというのは、バーザール経済そのままです。

Bは、革命第2世代原則忠実派です。新しい世代の原則忠実派で、彼らがそもそも「原則忠実派」といい出したのです。それでほかの人たちも、例えば伝統派なんかは現実問題としては全然原則忠実派じゃないのですが、原則忠実派という名前を借り出しました。

このBグループがそもそも原則忠実派といい始めた人たちです。年齢的には、アフマディーネジャードと同じ世代です。革命のときに大学生だった世代で、イラン・イラク戦争が始まると前線へ行って戦った人たちです。したがって、革命ガー

ド、あるいは陸軍で実戦経験をしている。戦後は、戦後復興の一環として建設ジハードという省がありましたが、地方に行って復興のために土建屋的なことをやった人たちです。

この人たちは、革命前に革命のために努力をした実績はないのですが、成人になったときからずっとこの革命体制とともに生きていて、この体制を支えてきた。自分たちが支えてきたという自負のある人たちです。アフマディーネジャード自身は、あんまり従軍経験は豊富ではないのですが、Bの主要母体のイスラーム革命献身者協会などのメンバーの大部分はもっと従軍経験があって、革命ガードの司令官レベルだった人などが入っています。

それから分派のほうは、いろんな傾向の保守派なのですが、追い出されてしまった人たちです。現職で、再選を望んでいるにもかかわらず、テヘランの統一戦線本部のリストに載らなかったのはなぜかといいますと、アフマディーネジャード大統領派が新人を10人、リストに入れたくて、ごり押しをしたためなのです。それが通ってしまったものですから、現職議員で10名ぐらいリストに載らない人たちが出てきてしまった。この人たちは当然、大統領批判派でありまして、この除外された人の中には、元閣僚などもいます。

したがって、JMOという統一戦線のほうが保守派の主流派です。追加で分派が出ていますけれども、これは力関係でいうと、JMOに全然及ばない。

改革派の主流派のリストは改革派連合本部(SE E)のほうです。ここは旧ハタミー派とラフサンジャーニー派がやっているところです。選挙本部長のムーサヴィー・ラリーはハタミーのときの内務大臣。副本部長はラフサンジャーニー派のマルアシー。ラフサンジャーニーの奥さんの弟で、元ケルマン州知事で国会議員もやった実力者です。これらに加え、イスラーム労働党、親ラフサンジャーニー派の官製労働組合の政党ですが、ここに入っております。

改革派の分派のほうは、国民信託党という。2005年に、大統領選挙の後につくられた政党です。これはキャッルービーという左派の改革派が領袖です。元国会議長でお坊さんです。彼はアフマデ

イーネジャードが勝った大統領選挙のときに立候補しました。本人は勝てると思っていたのですが、彼以外の改革派の候補が出ましたので、特にラフサンジャーニーが出ましたもので、改革派は分裂する結果になりました。

分裂さえしていなければ私が勝っていたのに、というのがいまだにありまして、けんかしているのです。絶対一緒にはやらないといって、改革派を割って、新しい政党をつくった。議員歴でいうと結構ベテランの議員がここには入っています。それから州知事経験者なんかが入っています。実務能力のある人が結構、国民信託党には入っているのですが、いかに魅力が全然ないのです。見た目もパツとしませんし、一般国民に対するアピール度が全然ない。まだ、ハタミー派のほうが格好いいといいますか、カリスマ的なアピールがあるのですけれども、国民信託党というのは全くそういうのがないのです。今回の選挙結果からみても、国民信託党は全然パツとしていません。

選挙の注目点は幾つかありましたが、まず1つは投票率です。投票率がなぜ注目されていたかと申しますと、前回は非常に低くて、50%ぐらいだったのです。8年前の選挙はハタミー派が多数勝ったときでしたが、投票率が高くて69~70ぐらいでした。12年前、1996年の国会選挙は71%ぐらいだった。前回は最悪の投票率だったのです。いまアフマディーネジャード政権下で、いろんな改革とか改悪とかが進んでいる中で、国民はこの選挙にどのぐらい期待しているのかということをはかるうえで、私は投票率に注目していたのです。

公式発表では60%とっています。これはかなりサバ読みして底上げした数字だと思います。実際は前回とほとんど変わらないか、若干高いぐらい。60というよりは50に近い、51~53ぐらいではないかと思っています。60という非常に丸まった数字しか、内務省の監督者評議員会も出していない。いわんとしているところは、前回よりもすごく高かったといたいのですね。

ところが、新聞などをみますと、たまたまここに持っているのは、各州の州都の投票総数の、前回と前々回との比較ですけれども、大都市をみて

いると、軒並み下がっているのです。なぜ大都市で下がっていることに意味があるかといいますと、大都市で浮動票が表に出てくるときは改革派が勝つのです。だから、選挙が盛り上がり風が吹いた場合には、改革派が浮動票をたくさん取るのですけれども、そこが軒並み下がっているのです。

### 資格審査で落とされた改革派

つまり、これは監督者評議会が改革派の著明候補、現職議員などを資格審査でボコボコ落としたから、浮動票の人たちは入れる相手がいなくなったわけです。エスファハーンやマシュハドなどの改革派はリストを出すことを断念しました。タブリーズも1人だけ、元ハータミー内閣の閣僚が改革派で、断トツ1位で当選しましたが、ほかのところはそういう目立った候補がいなかった。ですから、改革派に入れたであろう人たちが投票に行かなかった。前回よりも投票総数が上がっている都市もないわけではないのですけれども、下がっているほうが数としては多い。

にもかかわらず投票率が全国で10%上がったというのは、非常に信じがたい。かなりまゆつばだと私は思っております。

保守派が勝ちました。これは当たり前です。改革派は候補者が事前に排除されていました。保守派が勝つのは予想どおり、当たり前ということです。

投票日直後の3月20日がイランでは新年でした。年末の3月14日の選挙をやったわけです。資料にあります通り、223議席確定したうち166が保守、改革派が32、独立系が24でした。独立系というのは、無所属で出て、どちらの派閥の推薦も受けていなかった人です。この人たちは当選した後には、どっちかにくっつくこともあります。大体が保守系の独立系、改革派系の独立系ということになりますが、現時点では、保守系の独立系だというふうに考えられます。したがって、改革派は223のうち30ぐらいしか通っていないのです。

第7期の国会で改革派はそもそも30ぐらいしか議席を持っておりませんでしたので、30というのはそこそこ現状維持のようにみえます。けれども、違うのです。現職の有力議員が資格審査で落

とされていますから、同じ30といっても力のない30なのです。改革派で現職議員だった人はうるさいですから、政治力もありますから、そういう人たちは今回ほとんど排除されてしまいました。したがって、出てきた30というのは非常に弱体化した30です。これも保守派の計算どおりです。

投票日を年末ぎりぎりに設定したのは、みんなが忙しいからです。お正月用の買い物にみんなが右往左往しているときですから、あまり選挙に行かなきゃという感じにならないのです。暇なときだったら行ったかもしれない人が出てこない。アフマディーネジャード大統領が人気がない、現大統領に対する批判が多い、現政府に対する批判が多いというのは保守派も重々承知しているわけです。したがって、選挙が盛り上がりますと、政府に対する信任投票になってしまう。そういうことをしたくない。現国会は保守派が多数派を握っております。国会と政府というのは、仲があまりよくなかったのですけれども、やはり同じ保守派というふうに国民から解釈されると、現職議員が落ちる可能性があります。したがって、政府に対する信任投票にしたくないし、現職議員に対する信任投票にもしたくなかった。

したがって、組織票があれば、大体予定候補が通るようなレベルの低投票率であってほしかった。したがって、年末のぎりぎりのみんなが忙しいときにやろうということです。したがって、改革派の候補を排除して、さらにこういう日程を設定して、こういう結果を誘導した。

さらに、保守派(主流派)のリストを一本化した。保守派の統一戦線の中に大統領批判派と大統領派を一緒に入れています。一般投票者のレベルでは、この人は大統領批判派か、この人は大統領派かというのはわからないのです。同じきれいな顔写真、経歴つきのパンフレットをみんな配っているわけです。その中でいちいちアフマディーネジャード派とか、非アフマディーネジャードとは書きませんから、一般的にはわからないわけです。このリストで投票する人は、このリスト候補全員に入れるわけです。そのように差別化をさせないような形をしていました。その結果、政府に対する信任投票にしないという戦略が一応成功をした。



## 反アフマディーネジャード票が改革派へ

投票日にテヘランの投票場を回って感じたのは、改革派の人気でした。4年前も回りました。ちょうどハータミー政権の末期で、改革派に対する信頼度というのは地に落ちていました。改革派は全く役に立たない、あんなやつらは出てこなきゃよかったというような、惨たんたる雰囲気だった。今回はアフマディーネジャード大統領の評判が悪いがゆえに、反アフマディーネジャード票が改革派のほうにかなり動きました。改革派自体は全然さま変わりしていない。昔の名前で出て、昔のような政策を打ち出していて、私からみると全然脱皮していないのですけれども、にもかかわらず特に若者、中産階級の家族が、喜々として改革派に投票している。

4年前は改革派は嫌われていたのですが、今回は結構な人気だった。評判がいい。でも、改革派の何かが変わったからというよりは、アフマディーネジャードさんのいろいろな過激な、あまり思慮深く感じられないような発言がたくさん出てきたことと関係しているようなのです。イランの国際関係における地位とか、特に国民が不満に思っているのは経済政策です。インフレが進んだのは、政府の金融、経済政策の結果だとみんな確信しています。保守派支持の人たちもそう確信しています、非常に評判が悪い。その結果として、改革派は、投票所を回った感触では非常に人気があった。でも、いかんせん投票率が低かったものですから、組織票を持つ守派のほうが多く当選した。テヘランは特に投票率が低くて、40%弱といわれています。

今回、改革派の中で一番上のほうに食い込んだ人は、29位のマジード・アンサーリーという元議員です。30位から40位の間に改革派の人たちが結構つけているのですけれども、上から30人は大体保守派のリストの候補がそのまま通っている。つまり低投票率の結果、組織票があった保守派がやや上にあるが差は非常に少ない。5万票とか10万票程度ぐらいのものですから、日程がもうちょっと前にあったり、もうちょっと何らかの改革派のほうにわざがあれば、改革派が結構善戦していた可能性もあると、私は感じました。

今後の焦点ですが、国会選挙に関しましては第2回投票が4月25日にあります。残りの八十数議席が決まりますけれども、ここで保革が逆転する可能性は全くありません。保守派が多数を占めるのは確実です。

保守派の中で、アフマディーネジャード派と、アフマディーネジャード批判派のどちらがより議席数を伸ばすかがポイントです。アフマディーネジャード派というのは、そもそもがそんなにたくさん候補者を出しておりませんので、第1回目の投票の結果でいうと、そんなに勝っておりません。多分、普通の批判派の保守が多数派を占めるような国会ができるだろうと思います。

次のみどころは議長です。順当にいけば、現職のハッダード＝アーデルが再選されると思います。アフマディーネジャード大統領は、自分の選んだ候補者を議長に据えたかったようです。その人はAgha Tehrani というお坊さんですが、全くの新人で、政治家でも何でもありません。イスラーム哲学の博士号を外国の大学へ留学して取ってきたという人です。9割がた、この人が議長になることはない。ハッダード＝アーデルが突然死んだりとかしない限り。

ラリジャニは今回テヘランから出ずに、コムというところから出ました。選挙区が小さいので、獲得投票数も24万票ぐらいでした。テヘランで第1位のハッダード＝アーデルが80万票ぐらい取っているのと比べると見劣りがする。普通はテヘランの第1当選者が議長になりますので、ハッダード＝アーデルが議長になるのは、現職でもありませんしほぼ確実なのですが、ラリジャニは議長になりたがっている。なぜかといいますと、来年の大統領選挙で、またアフマディーネジャードに対する対抗馬として出たいのだと思うのです。出て、善戦するためには、対抗馬を一本化しなければいけないのですけれども、一本化できるかどうかはまだわからない。

それから、ちょっと先になりますが、2009年6月の大統領選への影響です。アフマディーネジャード大統領は、ハーメネイーさんとジャンナティーさんの枢軸が後ろで支えていますので、このい

ずれかがラリジャニあるいは非アフマディーネジャードの保守派候補を次の大統領に据えたいという意思表示をしない限りは、現職が非常に有利です。ラリジャニは出たいかもしれませんが、当選の見込みは少ない。ラリジャニ自身は伝統保守の出身ですから、固定票を持っていません。この前の選挙のときも、下から2番目だったと思います。ラリジャニの伝統保守というのは政策的、イデオロギー的にどん詰まりです。イランのような、若者がたくさんいる、発展途上の国で、ああいう伝統保守というのは、やっぱり受けが悪い。無理なのですが、ラリジャニは国家の指導部から信任が厚いものですから、いろんな要職を歴任してきました。けれども選挙なんかで通る人ではない。それで、クレデンシャルを増すために国会議長になりたがっているわけです。それも、まあ難しい。

選挙結果の諸政策に対する影響ですが、直接的には政府の国内経済政策への批判が非常に強まるでしょう。特にインフレを抑制できずに、金のばらまき政策をしています。それから、銀行の金利をインフレ率よりも6%ぐらい低いところで設定して、経済合理性のないことをやっています。そういうことを批判する議員が当選していますので、国会はますます大統領に対する批判を強めるでしょう。けれども、これは対決するというような批判ではなくて、やはり政策的な批判をするということですから、根本的にアフマディーネジャード政府の権力基盤が揺らぐということはない。

権力基盤自体は国会ではなくて、別のところにあります。最高指導者事務所と監督者評議会が後ろで支えている限り、現大統領は安泰です。選挙を仕切っているのはジャンナティーです。彼が選挙の立候補者を操作できますから、アフマディーネジャードにとっては非常に大助かりです。彼が来年の大統領選挙でも、国民からの批判にもかかわらず、今回の国会選挙と同様の操作をすれば、現職が十分に勝ち得る流れにはあります。

## ポスト・アフマディーネジャード

国会選挙自体が、アフマディーネジャード大統領の権力基盤を揺るがすようなことはなかったのですけれども、一つ注目しておいた方がよい点が

あります。ラリジャニと、現在テヘラン市長のガリバフと、それからレザーイーという公益評議会の書記(この人は、戦争中に革命ガードの総司令官でしたが)、この3人の前大統領候補が、団結して反アフマディーネジャードといたしますか、非アフマディーネジャードの保守派の一派を形成する可能性です。本人たちは動いていないのですけれども、周りの人間が3人を核として、反アフマディーネジャード派いうのを保守派の中でつくろうとしています。

ガリバフはテヘラン市長になって割とまだ年数が浅いものですから、もうしばらく待っても損はないと思いますので、来年出ない可能性もあると思います。ラリジャニは、負けてもともとという事で、彼は待っても全然将来伸びる可能性はないですから、来年候補になるかもしれない。両方出るかもしれないし、2人とも出ないかもしれないが、その中で対抗馬が一本化できた場合は保守派の中で競合的な候補が出てくることになります。

さらに改革派のほうも、全国的にアフマディーネジャード政権に対する批判が改革派に流れるという傾向があるとすれば、改革派も目立った候補で一本化さえすれば、そこそこ競争できるような素地はあると思います。問題は、キャッルービーが出たがっているのですけれども、キャッルービーではなかなか勝てないと思うのです。もうちょっと若くて、フレッシュな感じの人で一本化できればいいのですけれども、いかんせんあまりそういう人はいない。改革派が考えていることは、ハータミーさんをもう一回引きずり出して大統領になってほしいということなのですが、本人は絶対やらないといっていますけれども、機運のほうはどんどん高まっています。

改革派の現在の希望といえますか、期待というのは、キャッルービーを出さないように説得して、ハータミーさんが出るように説得をすることです。これができれば、来年の大統領選挙で改革派が勝てる、とのものです。もちろん自由選挙が行われたらという条件つきですけれども。その自由選挙が行われるかどうかというのもかなり大きなクエスチョンマークですから、実際に改革派が勝つためには、大きなハードルがある。けれども4年前

と比べると、国民のほうの雰囲気が変わっておりますので、全く素地がない話ではない、と私も思います。

5、6年後、改革派に対する期待があるという保障は全くありませんで、とりあえず今年、来年ぐらいだったら「まだある」ということです。

次に対米関係ですが、これを仕切っているのはハーメネイー最高指導者です。ハーメネイー最高指導者は、アフマディーネジャードがいろんな過激な発言、問題発言をしますけれども、それを叱咤するといいますか、抑えて軌道修正するような動きというのは一切示していません。アフマディーネジャードが大統領になって以来、国際関係における発言、対米関係における発言、核問題における発言でブレーキをかけるということは全くありません。

唯一ブレーキをかけるというか、軌道修正をしたがっているのは、国内経済政策の部分です。そこについてはハーメネイー最高指導者もやや不満に思っている節があります。これは明らかに、放っておくと大問題になりますから、合理的な判断だろうと思います。

### 泳がされているだけの現大統領

ということは、アフマディーネジャードが大統領である限りは、対米関係も、核問題も動かないのですが、それはアフマディーネジャードが動かしているからではなくて、ハーメネイー最高指導者がアフマディーネジャードを泳がしているからということです。

アフマディーネジャードの役割は、スポークスマンというか、発言しているだけなのです。広報担当のようなものです。彼が一応自分で何か物事を決定しているように偉ぶってみせますけれども、実際問題、既定路線をいっているだけであります。本当にウランの濃縮のこのステージをこの時期に始めるとか発表するのは大統領ですけども、大統領が決定してやっているわけでは全然ない。もうちょっと上のほうの指導部で決まっていて、既定路線が敷かれていて、それに沿って進んでいるだけであります。そういう発言係なのですけれ

ども、発言係として、別にハーメネイーさんはそれにブレーキをかけるそぶり、意思を全然みせておりません。ですから現在のような路線が、とりあえず来年の大統領選挙までは続く。

注目すべきは、先ほど申しましたようにアフマディーネジャードの対抗馬になるような有力な保守派の候補が出てきて、その人とアフマディーネジャードの間での決戦投票のような大統領選挙になるか否かです。そういうことになった場合には、アフマディーネジャードは多少プレッシャーを感じますから、もうちょっと政策をよくしようと思わなければいけないかもしれません。けれども、現在は、全くプレッシャーを感じておりませんから、本人のやりたい放題、好き勝手にやっております。

ただ、彼の性格から考えますと、自ら軌道修正をしそうな人には全然みえません。誇大妄想狂といえますか、自信家といえますか、ややおかしいといえますか、そういうところがある人ですから、なかなか回りを見て自ら路線を考え直すタイプだとは思いませんけれども、そういう方向に仮に国家の指導部が誘導したければ誘導することは可能ではあります。

ただ、ジャンナティーとハーメネイーの動きをみています限りでは、アフマディーネジャードをこのまま泳がしておくほうが得策であるとみていのではないのでしょうか。対米関係が悪いほうが得策である、核問題で国際社会と軋轢が深まれば深まるほど得策である、国内の現体制の維持においては、そのほうが得策である、というふうに計算しているように私にはみえます。

つまり、核問題のせいで国連制裁とか、金融制裁とか、EUとかアメリカ、日本との関係が悪くなっているのですけれども、少なくとも権力の中核にいてテヘランに座っている人たちの感触としては、これは危機ではない。これはクライシスではなく、十分波乗りのように乗っていけると考えているようにみえます。

その背景には、油価がこれだけ高く、お金がじゃんじゃん入っていますから、いろんなことに使える。国内で不満が起これば、そこでお金をば

らまいて解決すればいいというようなこともあります。ややおごっているのか、慢心しているのか、われわれとしては厳しい判断が必要なところですが、少なくとも彼らは現在の状態を危機とは思っていない。核問題に関して、イランが窮地に追い込まれるというふうには考えていない。そういうふうにはならないという確信を持っているようにさえ思われます。

そういう背景もありますから、来年、アフマディーネジャードが再選されても、別にイランの国益が損われるようなことはない。指導部としては、むしろそのほうが国内の改革派も抑えることができるし、外国との関係がよくなるのは、欧米が悪い、国連が悪いのだというふうにはスケープゴートにすることができます。経済が悪いのは制裁のせいだとか、いろんなことをいえます。投資を呼び込む努力をしなくても済みます。彼らにとってはこっちのほうが得策だというふうに思っている節があります。したがって、大きくは動かない。

アメリカの大統領選挙の年でありますから、通常ですとアメリカの大統領が変わると、米・イラン関係も動くのではないかという期待がテヘランでも少しはあったりするのです。けれども、私が今回行った感触では、そういうのはなかった。改革派の人などとも会って話をしましたが、彼らも、民主党になろうが共和党になろうが、アメリカの政策は変わらないとみているようです。この制裁というのは米大統領の一存では簡単に変えられないような形で積み重なっていることをよく承知しております。

したがって、あまり短期的に米・イラン関係が改善する可能性があるとは、改革派のほうも思っていない。保守派のほうはそういうことはしたくないと思っている。したがって、民主党が勝とうが、共和党が勝とうが、アメリカの政策は若干それでぶれることもあろうかと思いますが、イラン側の対応といいますか、反応というか、動きというのはあまり今と変わらないのではないかと思います。

## ＜ 質 疑 応 答 ＞

**司会**（脇祐三企画委員・日経論説副委員長） ありがとうございます。1点、追加のコメントをいただきたいのです。いまのお話でも、経済混乱といいますか、インフレ率が政府発表でも19～20%ぐらいですか。実感としては30%ぐらいのインフレといわれる中で、大統領が高金利は庶民を苦しめるとかいって、中銀総裁の首を切って金利を引き下げたりするという極端なことをやっている。

それから、これだけ油価が上がっているのに、なぜか産油国イランは財政が大赤字。一体どこに金をばらまいているんだろう。国民は、外交よりも経済混乱に対して不満を持っている。そういう状況でも、国会では大統領批判派が多数になるんですか、しかし、アフマディーネジャードの優位は変わらない。ちょっとわかりにくいんですけども、経済混乱に対する国内の危機感なり、国民の不満というのはどの程度のものなのか。

**松永** かなり不満は高いと思います。今回の選挙も、唯一争点みたいになった点は、経済政策はだれの責任かというところでした。現職議員などは、我々の責任ではないのだ、我々は4年間任期があったけど、最初の2年はハタミー政権で、あとの2年はアフマディーネジャード政権と一緒にやった。経済問題の混乱が起こったのは後の2年でしょう。だから、だれに責任があるかわかるでしょう？ こんな選挙キャンペーンを現職はやっておりました。新人のほうは、私が物申してやるといって出馬して、当選の暁には物申すぞという形で出てきたわけです。

今回は大統領選挙ではなかったもので、直接皆が責任の所在があるところは政府だという認識、コンセンサスはあったのですが、そこが信任投票の対象にはならないように、保守派の権力機構が努力をしましたので、ぎりぎりのところでそうはならなかったような感じです。

したがって、みんな来年の大統領選挙に注目しているのです。これから来年の大統領選挙までに経済状態が好転する可能性は非常に少ない。昨日も経済大蔵大臣のダーネシュ・ジャアフアリーの発言が、現地の新聞で報道され、政府報道官が「そ

んなことはない」といって否定していますが、意見対立がかなり歴然としている。大統領と経済大蔵大臣の間で意見対立があって、大統領は「インフレは全然問題ない。ちゃんとコントロールしている」といっているにもかかわらず、経済大蔵大臣は「実はアウト・オブ・コントロールであって、我々の手に負えていない。有効に対処できていない」ということを公言しております。とかげのしっぽ切りといいますか、政権から仕事ができる人はどんどんいなくなってしまうような形になる可能性があります。

その意味では来年の選挙がおざなりでなくて、実質的な選挙に、特に保守派の中での選択肢があるような選挙になる可能性は、徐々にお膳立てが整いつつあるようにもみえます。

ただ、そういう方向に行くかどうかは、先ほど申しましたように、指導部がどういうふうに誘導するか、どういうふうに操作をするかによります。必ずしも国民的な土俵ができてからといって、そういう選挙が実際に行われるかどうかはわかりません。けれども、実際に比較的自由な選挙をやったら、現職大統領が負ける可能性は非常に高い。その理由は、経済政策の失敗である。

今回の投票率が上がらなかった理由も、そこに批判があって、国会選挙で投票したってしょうがないじゃないか、悪いのは政府なのだからというところもあったと思うのです。不満は非常に高いのではないのでしょうか。

**司会** イランはイスラーム法学者、俗に我々が使っているところの聖職者の集団指導、そういう形で革命以来やってきたような国ですが、アフマディーネジャード自体はイスラーム法学者でない。革命防衛隊出身者で、黒い衣を着ている人とは違う人ですよね。先ほどの説明でも、革命防衛隊出身者とかが、第2世代としては、聖職者以外の人だんだん政治の世界に出てきているわけですが、それと、聖職者の間に一種のイデオロギー対立なり政治対立のようなものが起きる情勢ではないんですか。

**松永** いまのところはないです。アフマディーネジャードさんの場合はちょっと特殊なのですが、

彼はテヘラン市長(選挙でテヘラン市長になったのではなく市の評議会が任命)になる前は大学の先生をやっていました。政治家としての経歴はほとんどない。選挙で勝ったのは大統領選挙だけです。その彼の世代で革命ガードの出身とか、いろんな州知事府とかを経て国会議員などになった人たちなどは、ハーメネイーさんが育てた人たちです。

ハーメネイーさんが89年に最高指導者に就任したときに、自分の支持基盤、権力基盤はなくて、どういう形で自分の権力基盤を築いていくかというときに、2つの姿勢を打ち出しました。

1つは反米、アメリカに対してノーという、絶対アメリカと妥協しない、反米スタンスを崩さない、これが革命体制の維持にとって必須である、不可欠である、と。それは、革命ガード出身者とか、イラン・イラク戦争の従軍の第二世代の治安保守といいますか、そういう人たちと全く意見が一致するわけで、治安保守の人たちは、反米、革命体制というのが、彼らのポリシーなのです。

ハーメネイーさんは、最高指導者になる前は、実は比較的柔軟な人だったのです。大統領のときなどは非常に柔軟だったのですけれども、最高指導者になったときに、自分の権力基盤が弱いので、どこかと一緒にくっつかないといけないと考えた。反米勢力、反米のスタンスをとっている治安保守勢力とくっつくことが1つ。

もう1つは、アヤトラ・ジャンナティーを通じて、文化保守とくっついた。文化保守のお坊さんとくっついて、もう1つは革命ガード、治安関係者とくっつくということで、この2本柱で彼は最高指導者の権力基盤を固めていった。もうそろそろ20年近くになりますが、かなりいろんな任命権がありますし、自分の人脈も広がって、その権力基盤はかなり強固に構築されております。その1つの柱が第2世代の治安保守ですから、彼らとハーメネイーさんというのは、そういう溝はほとんどない。お互いに持ちつ持たれつで、ハーメネイーさんは彼らが必要だし、彼らもハーメネイーさんが必要である。

アフマディーネジャードさんの場合は、非常に特殊です。非常に奇妙な人です。彼は、シーア派

の第12代イマームである、隠れイマームの信奉者なんです。イスラーム法学者を飛び越えまして、隠れイマームと直接交信ができると思っている。

例えば、次ぎのような話があります。彼は2005年に大統領になりました。6月に選挙で勝ち、8月に就任しまして、9月に国連総会に行き、演説を初めてやりました。初めての大舞台でなれていないものですから、偉そうに出てきて、予定原稿をゆっくり読んでいたのですが、持ち時間が足りないということに途中で気がつく。それでバーッと読み出したのです、物すごく早いスピードで。

すごく格好悪いなと私は聞いていて思っていたのですけれども、彼は猛スピードで原稿を読んでいるときにトランス状態になって、隠れイマームの光の到来を感じたというのです。ここに隠れイマームが立っていて、私を見守ってくれていると本当に思ったらしく、帰国後にコムに行って、そのことを大アヤトラに説明しているんです。「私を隠れイマームが見守ってくれたんですよ」といって。坊さんのほうも、こいつは困ったなと思っても、まあしょうがないから、よしよしという感じでつき合っているのですけれども、そういう意味では、非常に危険な宗教思想をお持ちの方で、聖職者を飛び越えているんです。

もう一つ別の例もあります。彼が就任した直後に、革命ガードの輸送機がテヘラン空港離陸直後に墜落しました。住宅地に突っ込んで、乗っている人が70人ぐらい亡くなったことがありました。国営テレビのIRIBの人たちが軍事演習取材に行くために乗っていたのです。そのときに大統領がお悔やみの電報というか、メッセージを出しました。革命ガードの飛行機が落ちたときのお悔やみは、最高指導者に対して大統領が出すのが普通なのです。けれど彼は何と隠れイマームに対してお悔やみのメッセージを出したのです。さすがにそれは多分怒られたのでしょう。2度とは繰り返していませんけれども。そのくらい変わった人なのです。今は先ほどいいましたように利用価値があると思って泳がしているのですけれども、本当に勝手に泳がして、本当に自由になったら、イスラーム法学者支配を崩してしまいかねないような感じもあります。

**質問** 今回の選挙結果は、対外政策、それから核問題にほとんどインパクトを与えないという話でした。それを前提にしたうえで、今後、イランの核問題、特に国際関係、アメリカとの関係において、どういうシナリオが考え得るでしょうか。

**松永** イラン側は、ご案内のとおり政府報道官レベルでは、交渉しないと。EUと交渉も決裂して、もうやらないとかいうようなこともいっています。それが最終的なものかどうかわかりませんが、交渉ぐらいは続けるかもしれません。けれどもイラン側のほうに危機感がないのと同時に、妥協する理由がないというのが彼らの考えでして、例えばウラン濃縮を一次停止をするとか、いまどんどん拡大しているプログラムを停止をするとか、スケールダウンするとか、そういうことをしなければいけないという理由を感じていないと思います。

一つには先ほど申しましたように、制裁が効いていない。怖いと思っていない。彼らがやっていることは、彼らの権利の範囲内だというふうに確信している。政治的にもやめる気がない。戦略的にも続けたほうが有利であると思っている節がある。したがって、国際社会のほうからいいますと、手詰まり状態なわけです。ブレーキをかけたいと思っても、ブレーキをかけることもできない。中止をさせたいとしても、中止させる手段もないし、きっかけもないし、ということです。

イラン側にとって怖いのは、金融制裁がもうちょっとタイトになった場合かもしれない。いまはユーロとか円建てにするとか、いろんな回り道もあって、第三世界の銀行とか、いろんなところが使えるので、いまのところではそんなにきいていない。特に油価も高いのできいていないとの話を、テヘランでは聞きました。

国連の制裁というよりは、アメリカが勝手にやっている金融制裁の締めつけがきつくなれば、それは影響が出ます。ただコストが上がるだけで、本当に息の根をとめるところまではいかないだろうというふうに連中も読んでいますので、そこへ追い込むことは非常に難しい。

これは理論的な可能性ですけれども、もう一つは軍事的な圧力しかない。2003年にアメリカがイ

ラク戦争を始めて、イラクの国家がすぐポシヤンと倒れてしまったときに、イランも危機感というのを感じました。けれども、その後こういう状態で、米軍は張りつけ状態になっていますので、いまは怖くない。仮にイラクの状態が完全に片づいて、アフガニスタンの状態も完全に片づいて、世界のほかのところに全然問題がなくて、米軍が暇になったときに、ペルシャ湾にガンと出てきたら恐いですが、いまのところそういうことも起こりそうにないというふうに連中は踏んでいる。

私は、国際社会の側が2年、3年、5年ぐらいの短いタイムスパンで、イランに対して核計画の停止なり中止という結果を求めており限り、どこにも到達しないと思っています。他方、もっと長い、5年以上、10年、15年ぐらいのスパンで臨めば、何か落としどころが探れると思います。

なぜかという、5年、10年、15年のスパンで考えると、最高指導者が死ぬかもしれませんから。ハーメネイーさんが死ねば、状況がかなり変わります。その時、もしまだラフサンジャーニーが生きていて、発言力が増した場合には、それは全然違う土俵になります。2年、3年、5年ぐらいだと、まだそこまできかないと思います。

長期戦をやるのであれば、一番有効なのは、国連の査察です。IAEAの場を通じたテクニカルなやりとりを通じて、イラン側の透明度を増して、イラン側が軍事転用（ダイバージョン）ができないように、ダイバージョンをめざすことのコストが非常に上がるような形で関与し続けていく。これが一番重要だろうと私は思います。

つまり、IAEAの有効利用です。ほかのところで制裁を頭ごなしにやっても、イランはいうことをきかないですし、制裁というのは有効ではない。本当に頭ごなしのプレッシャーをかけるには、軍事的な圧力しかないと思います。経済的な圧力では、油価がドンと下がれば別ですけども、現下の状況ではなかなか難しい。

テクニカルなレベルでコストを上げて、モニタリングをふやしてダイバージョンするコストを上げることによって、彼らが実際にダイバージョンができないようなことを続けて、最高指導者なり

指導部がかわるのを待つしかないと思うのです。そういうことであれば、5年、10年、15年のスタンスで国際的な対イラン政策を追求するのが賢い路線であると思います。しかしどこの国の政府もデモクラシーですから、もっと短いスパンで政治というのは動いています。国連安保理なんかも短いスパンで動いていますから、なかなかそういうふうにはいかない。けれど、解決の途はそれ以外にないとは思っています。

**質問** イランの指導部とイラクのシーア派の関係についてうかがいます。一般的に、イラクのいろんなシーア派組織に影響力を持っているなどといわれていると思うのですが、力点というか、具体的にどこをとりわけ押しているのか。そういう力点の置き方みたいなものはあるんでしょうか。例えば、いまのマリキ政権に対しては、どのようなスタンスをとっているのか。サドル師派なんかにしてもそうなんですけれども、その辺を説明してください。

もう1つ、ムクタダ・サドルがコムにいることの意味合いというのは何かあるんでしょうか。

**松永** 最初のほうですけども、保険のようなもので、すべてのグループとある程度つき合って様子をみている。つまり、現在の状態が最終的な状態ではなくて、米軍が引き揚げた後のイラクにおいて、イランが影響力なり良好な関係をイラクの権力者と握ることが最終目標であるとすれば、現在は途中の段階です。だれが最終的に残るかわかりませんから、みんなにそれなりに恩を売って仲良くしておくという計算だろうと思います。

マリキ政府は、現在の政府でありますけれども、米軍がいなくなったときに政府であるかどうかというのはわかりませんし、わからないと踏んでいるのではないかと私は想像します。

現在はイラクの顔ですから、ちゃんと良好につき合っていますし、イラン側にももちろんカウンターパートがありますから、付き合いやすいですね。むしろサドル派なんかはカウンターパートというのが表立ってつくりにくいですから、こっそりつき合わなきゃいけない。

それから、SCIRI といいますか、旧名で SAIRI の人たちは、それなりに長いつき合いですから、それなりにつき合いをしやすい。だから、つき合いにくいのはむしろサドル派だろうと思います。

最後の質問の、なぜムクタダ・サドルはコムにいるのであろうかということですが、1つは、やはりナジャフというところのハウザーといいますか、マドラサといいますか、イスラーム神学校のネットワークは、やはりシスターニが仕切っています。これも、昨日今日から仕切っているんじゃないくて、シスターニの先生であるホーイの時代からなのです。ホーイの前にいましたムフシン・ハキームは1970年に亡くなりましたから、1970年以降の世界というのはホーイさんの世界なのです。今はホーイさんの一番弟子であるシスターニさんが仕切っていますから、ムクタダ・サドルは居場所がないのです。つまり、勉強したければ、単にいただけだったらクーファにいますけれども、もし勉強して、ちゃんと研鑽を積みたい、坊さんとしてのクレデンシャルを増したいというのであれば、行くところはレバノンかイランかしかないわけですね。イラクにはもう行く場所はないですから。

レバノンに行くというのは、あまりそういうことは普通しませんから、どちらかというと、みんなコムかナジャフに行きますから、全世界的には。ナジャフにいけないので、コムで勉強する。もし勉強することが目的であれば、コムに行っているのは理屈が通る。

そういうことをイランの国家が受け入れている理由は、恩を売りたいからでしょう。ご存じのとおり、ナスルッラーもしばらくヒズボラーの中の内紛でベイルートにいらなかったとき、コムに来ていました。口実は勉強しているということだったのです。そのときにハーメネイーさんとの関係を構築しまして、いまのナスルッラーとイランの友好関係というのは、そこに基盤がある。

ナスルッラーがコムに来た理由は、彼もナジャフに行けなかったのです。もともとナスルッラーもヒズボラーの創設者の兄貴分の人も、みんなナジャフでムハンマド・バーキル・サドルの弟子を

やっていた人たちです。ですから、もともとヒズボラーの起源はナジャフにあるんですけれども、それにもかかわらずナスルッラーはコムに来た。同じようなことだと思います。

したがって、力点というのはいまのところなくて、みんな満遍なくつき合っておいて、担保を確保しているような状況ではないかと私は考えます。

**司会** いまの質問にも関係あるんですけど、アメリカは米兵の犠牲がふえとか、あるいはレバノンへの介入といった問題で、去年から革命防衛隊を名指し攻撃というか、革命防衛隊だけピックアップして制裁対象なんかになっているような動きがある。革命防衛隊というのは、独自の思惑で動けるような組織なのか、あるいは革命防衛隊を牛耳っているのは、政権上層部でどういうところなのか。

**松永** もちろん思惑はあると思います、組織ですから。長く存在している組織ですし、その道のプロですから、あると思いますけれども、シビリアン・コントロールのイラン版といいますか、クラーリカル・コントロールというものがきいていると思います。

したがって、お坊さんが上にいる。具体的にハーメネイーさんですけども、ハーメネイーさんとか、ハーメネイー事務所の意に反することを革命防衛隊が勝手にやるということは考えにくい。何かやりたいことがあれば上に挙げて、いいですかと一応オーケーをとってやっているようなことが通常であろうと思います。

瞬間的には、例えばイギリスの海兵隊を拿捕したときに、ハーメネイーさんの事前オーケーがあったのか、ないのか、それはちょっとわかりません。そういう比較的小さな事件は、勝手に動いている可能性はありますけれども、もうちょっと大きな戦略的な動きは、ちゃんと相談してオーケーをもらっているはずです。

(文責・編集部)



## 国会選挙後のイラン

2008 年 4 月 7 日

日本記者クラブ「中東研究会」

松永泰行（東京外国語大学）

## 1. イラン国内政治における国会選挙

- ・国会：一院制、立法府（であるが、監督者評議会の制限を受ける）
- ・定員：290 議席。207 選挙区（内 172 が 1 人区。テヘラン：30 人区。地方 4 大都市：6 人区、5 人区(x2)、4 人区。残り、3 人区が 8、2 人区が 22）。5 議席は宗教的マイノリティに配分（ゾロアスター、ユダヤ、アッシリア、アルメニア x2）。
- ・選挙方法：定数分連記性（名前か候補者番号を自筆で記入、代筆可）。3 人区以上では党派別推薦候補リストに基づく投票行動が一般的。
- ・当選者：第 1 回投票で各選挙区の総投票数の 4 分の 1 以上を獲得した候補の内、上位候補が当選。第 1 回投票で右の条件を満たす候補がいない場合には、未決の定数の 2 倍の数の上位候補者間で決選投票。第 2 回投票では、相対多数を獲得した候補が当選。
- ・立候補者の資格審査：国会選挙法が定める被選挙人資格の条件を満たすと判断された者のみが、選挙運動期間および投票日に立候補者として認められる。1988 年の第 3 期選挙までは、内務省が資格審査を行った。1992 年の第 4 期選挙より、監督者評議会がより厳しい条件で審査を行使するようになった。現行の選挙法の条件は以下（特に問題なものは、第(1), (3), (5)項）。

## 国会選挙法第28条

国会議員の被選挙人資格は下記の通り：

- (1) イスラームとイラン・イスラーム共和国の聖なる体制への実践的な信仰とコミットメント(e'teqad va eltezam-e `amali)
- (2) イラン国籍
- (3) 憲法と「イスラーム法学者の絶対的統治(velayat-e motlaqeh-ye faqih)という進歩的な原則」への揺ぎ無い公言(ebraz-e vefa-dari)
- (4) 最低でも修士号かそれに同等のもの（但し、5年間の専門性を持つ管理職（民間あるいは行政府）の前歴あるいは5年間の教育・研究経験がある場合や、国会議員を1期務めたりしている場合には、大卒だけでも有資格とする）
- (5) 該当選挙区で、悪い評判をもっていないこと
- (6) 見聞き話すことができる身体的健康
- (7) 30歳以上75歳以下であること

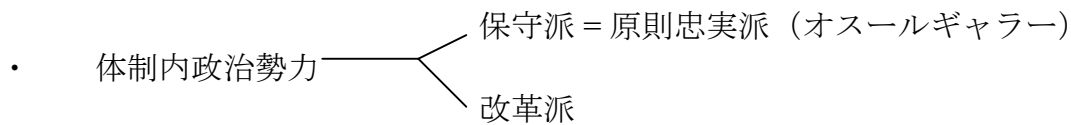
さらに、監督者評議会の解釈では、被選挙資格は優れた資質／態度／経験などを通じて「獲得」(ehraz)されねばならない。1992 年以降、多くの非保守系候補がこれらの手段で、事前に排除されてきた。

Table A-1: The Disqualification and Nationwide Turnout, 1984-2004

Parliamentary Elections	Number of Registered	Number of Disqualified	Rate of Disqualification (%)	Voter Turnout (%)	Annulled Results by Districts	Number of Affected Seats
2nd (1984)	1584	271	17.1	64.64	16	23
3rd (1988)	1997	278	13.9	59.72	15	16
4th (1992)	3150	1100	34.9	57.81	3	3
5 <sup>th</sup> (1996)	5359	1900	35.6	71.1	14	21
6 <sup>th</sup> (2000)	6856	576	8.4	69.23	10	12
7 <sup>th</sup> (2004)	8172	2185	26.7	51.19	5	5
8 <sup>th</sup> (2008)	7597	2769	36.4	[c. 60.00]		

GC spokesman (2-23-08): over 4500 approved; 2200 not approved; 569 did not file for reconsideration; 310 withdrew candidacy. → (7597-310)-(2200+569)=4518.

## 2. 第8期国会選挙前の各政治勢力



その他（イラン自由運動、宗教的ナショナリスト）

### （1）保守派内部の派閥

- ・「原則忠実派統一戦線」（JMO）

A. 伝統的保守派（聖職者、バーザール系など）：闘う聖職者協会（JRM）、エンジニアイスラーム協会、イスラーム連合党、コム神学校教員協会

B. 革命第2世代原則忠実派（イラン・イラク戦争従軍経験者、革命ガード、建設ジハード関係者など）：イスラーム革命献身者協会、変革支持原則忠実派

C. アフマディーネジャード大統領派：「満点奉仕者の黨り」

- ・分派：「原則忠実派拡大連合」（EFO）

JMOの推薦を得ることができなかった現職議員など。ラリジャニ=ガリバフ=レザーイー（2005年時の大統領候補3名）派として選挙運動をしたが、レザーイーを除く2名との関係は希薄。

- ・「改革派連合本部」（SEE）

ハータミー派（MRM, IIPF, IRMO）とラフサンジャーニー派（HKS）からなる改革派連合。イスラーム労働党（HIK）も参加。

- ・「国民信託党」（HEM）

キャッルービー（元国会議長／前大統領候補）を領袖とする改革派分派（元国会議員、州知事経験者など）。

## 3. 第1回投票（3月14日）結果と意義

- ・保守派（即ち、原則忠実派統一戦線）の勝利。

3月18日報道のファールス通信による集計：

223議席確定（保守派：166、改革派：32、独立系：24、不明：1）

→67議席が第2回投票へ（134候補の内訳。保守：67、改革派：41、独立系：26）

- ・監督者評議会の思惑通り：政府（大統領）／現在の多数派への信任投票にしない

a. 投票日の設定（年末ぎりぎり、ノールーズ：3月20日、仕事納め：3月18日）

→低投票率（一定の組織票を持つ保守派が有利。テヘランで上位28位独占）

b. 改革派候補の事前削除（マシュハド、エスファハーン：候補者なし。テヘラン、タブリーズ：著名候補、現職を排除）

c. 保守派リストの一本化（保守派内部の大統領批判派と大統領派を区別させない）

#### 4. 今後の焦点

(1) 第2回投票：4月25日（4月5日内務省発表：81議席を巡り162候補；選挙期間：4月17日から1週間）

(2) 5月末、新国会開会：次期議長をめぐる攻防

現職（ハッダード=アーデル）再選か

新たな人材（Larijani [A] あるいは Agha Tehrani [C]）を選出するか

(3) 選挙結果の諸政策への影響

- ・ 政府（大統領）の国内経済政策への批判が強まる
- ・ 対外政策、核問題などへのインパクトはない
- ・ アフマディーネジャード大統領の権力基盤  
ハメネイ最高指導者  
監督者評議会書記（ジャンナティ）

(4) 2009年6月：第10期大統領選挙

- ・ 現職（アフマディーネジャード）に対して、誰が保守派から対抗馬として出るか（さらに一本化できるか）  
Larijani（コム選出議員）  
Qalibaf（テヘラン市長）
- ・ 改革派（誰がでるか、一本化できるか）  
Karrubi  
[Khatami?]